

■快樂亭ブラック **落語家、講釈師、奇術師。ラフカベクディオ・ハーン**と同時代を生きた、最初で最高の外国人タレント。

かいらくていぶらっく
五ヶ国条約・1858＝

8月18日政変 1863＝ 5歳：事業に失敗した父が、イギリスに戻るべく、評判の良かった歌手としてアジア各地を巡業しながら来日、日本に感銘して帰国を止め、横浜居留地初週刊英字新聞{ザ・ジャパン・ヘラルド}の記者となり、日本永住を決意した父の後を追ひ、母とともに**来日**。

薩摩藩士密航1865＝ 7歳：**大政奉還**・・1867＝ **9歳**：**明治維新**・・1868＝10歳：**学問のすすめ**1872＝14歳：父が、{日新真事誌}という日本語の日刊新聞を発行するとともに、一家で東京に出、大火で焼失した築地の外国人居留地の代わりの芝増上寺に住み、以後、読み書きはダメながら、**日本語がどんどん上達**。

明治6年政変 1873＝15歳：父が、神奈川県でも盛んになった自由民権派を啓蒙する横浜の外国人の立場から、明治政府の政策を盛んに批判するとともに、西郷隆盛、板垣退助らと交際し、江藤新平などは度々来宅するといった環境に育ち、この頃、**近所にいた演説好きの堀竜太と親しくなり、度々演説に立つ**。

初の民間工場1875＝17歳：新聞紙条例が施行され廃刊、両親は上海に渡ってしまうが、***単身日本に残る道を選び、奇術師三代目柳川一蝶斎の一座に雇われて、西洋奇術を披露し始め、ハール・ブラックの名で、何度も舞台に立つうち、演説では当代一流と言われた講談師2代目松林伯門に注目され、誘われて、横浜馬車道の富竹亭で政治演説に飛び入りで出演、この頃には、日本語もすっかり身につけて、父が病氣治療のため、再度来日し、幕末から維新にかけて(1854～1877年)の日本について、「ヤング・ジャパン」を執筆。**正式に松林伯門に弟子入りし、英人ブラックを名乗って、馬車道の寄席で芸を披露、父の仲間の政治集会でも演説し、新聞広告や記事にもなっている。当時の芸人は政府の許可がないと寄席に出ることができなかったため、講釈師三代目伊東燕凌の仲介で外務省と掛け合い、日本の近代ジャーナリズムをリードしてきた父が死去、遺作「ヤング・ジャパン」は、今日もなお研究者に利用されている。許可を得、以後、本格的に寄席に出演するようになるが、集会条例に嫌気、東京に移住すると、落語家や講談師が規制逃れのためにしていた{軍談}一派に加わり、厳しくも情があり、洗練された趣味人でもあった講釈師放牛舎桃林に入門、父の死で、もともとだらしのなかった金銭面で厳しくなるも、自由になり、すでに有名になり始めていたことから、イギリス帰国を選ばず、演芸の世界に舞い戻り、築地に居住して、講談のネタ集めに軽罪裁判所で傍聴するも、酒を密造して、和英両方の新聞に、自らのスキャンダル記事が出るなど、母親、弟妹の悩みは絶えず、ついに廃業、母親の期待する英語塾を京橋の東京学館で開き、経営者の弟宮武外骨と親交するも、学生が集まらず止めてしまい、友人の落語家の誘いで、**維新時最高の三遊亭円朝らが率いる三遊派に入るや、一人前の落語家に転身、イギリスの通俗小説「花と雑草」を翻案した『草葉の露』が大成功、1年後に出版された英会話の本から、興味や英語力が分かる。群馬県の伊香保温泉を気に入って、以後、しばしば訪れるようになる。市東謙吉速記で記録された『草葉の露』が出版され、以後、翻案落語を続けていくことになる**とともに、円朝のライバル扱いまでされるようになる。****

帝国憲法発布1889＝31歳：**足尾鉾毒始**・1891＝33歳：築地病院創立者のスコットランド人ヘンリー・フォールズによる、指紋を使った犯人捜査のアイディアに触発されて創作、出版、江戸川乱歩をして、指紋を鍵にした日本初の探偵小説と言わしめた***『岩出銀行血汐の手形』によって名声が頂点に達すると、快樂亭ブラックを名乗り、以後、今村次郎速記の講演『流の呪』『切なる罪』を{やまと新聞}が連載したり、福島昇六速記の口演『英國龍動劇場土産』が出版され、訳述『薔薇娘』と演述『車中の毒針』は講演『流の呪』とともに、探偵小説として出版されるなど、八面六臂の活躍が始まる。講演『剣の刃渡』。幡随院長兵衛を演じるのが得意だったり、自らの風貌では不可能な女形に挑戦して失敗するも、**金銭面でも一気に恵まれるようになって、浅草猿若町菓子屋の娘石井アカという日本人女性のと結婚し嫡養子となり、日本国籍を取得。本名を石井貌刺屈(ぶらつく)と改めた、この国際結婚は祖国イギリスで新聞が大々的に報じ話題になった。****

大本教・・・1892＝34歳：講演『剣の刃渡』。幡随院長兵衛を演じるのが得意だったり、自らの風貌では不可能な女形に挑戦して失敗するも、**金銭面でも一気に恵まれるようになって、浅草猿若町菓子屋の娘石井アカという日本人女性のと結婚し嫡養子となり、日本国籍を取得。本名を石井貌刺屈(ぶらつく)と改めた、この国際結婚は祖国イギリスで新聞が大々的に報じ話題になった。**

郡司千島探検1893＝35歳：

日清戦争始・1894＝**36歳**：**日清戦争終**・1895＝37歳：ブラック家にとっては、日本女性と結婚し、芸能界入りして有名になったことは迷惑でしかなく、神戸で競売人をしていた弟ジョン・レディ2世は高座を妨害している。{読売新聞}の連載インタビューに応じ、自分の生まれ育ちを尾ひれをつけて語り、**「チャールズ・ディケンズの『オリヴァー・トウィスト』を原作とする口演『孤児 英國實話』、日本初とされる催眠術の実演を、日本初のチャリティー興行として試みたりしている。この間、引き取っていた孤児を養子石井清吉とし、芸人に育てて行く一方、アカとは離婚している。例年のように伊香保温泉を訪れ、松本から高山に向かい、平湯温泉を楽しむなど、地方興行も幾多。口演『神田武太郎』『師でありライバルでもあった円朝が死去し衝撃、落語界からも排除され始めるも、{神戸ウィークリー・クロニクル}に、匿名の読者からの、ヘンリーの子供時代の逸話の投書が掲載されるほど、大衆が関心を持つ、いわゆるタレントになっていて、地方巡業はより頻繁になっていたが、強い酒におぼれ、再び金銭面などでも苦勞するようになり、*日本の音楽等を取材すべく、来日した英国グラモフォン社の録音技師フレッド・ガイズバーグから声をかけられると、積極的に親しい芸人を誘って落語や浪曲、かつげれなど諸芸を、日本初のレコード録音にする。音質は不鮮明ながら、冒頭の自らの『風土言葉の唄』以下、落語から能まで、20名を超える明治の各分野の名人たちの肉声が残され、言語学者清水康行によれば、ヘンリーの会話力を流暢で立派であり、当時の標準的な東京式発音の良い例になっていると言う。**

日露戦争始・1904＝46歳：この頃、小日向の鳩山和夫の家を借りて、立て込んだスケジュールの間に、胃腸病院長と協力して、得意の催眠術を利用した治療を試み、手の付けられない少年北村軍次を引き取って、ヴァイオリンを学ばせるも、悪いことも沢山されるなど、なお、自由にやりたいことをやっている。**勃発した日露戦争に、他の落語家同様、出征しようとするも、風貌から叶わなかったが、2代目松林伯門、放牛舎桃林が相次いで死去。戦後、東郷元帥から金銭的な援助があったものの、《文芸倶楽部》に短編『煙草好き』が掲載されたのを最後に、人気が凋落して、自らに関する記事が全く見られなくなり、落語見立て東前頭四枚目まで落ち、{ジャパン・クルニクル}に、弟ジョンが結婚し、日本に戻ってきたことを好意的に紹介した記事が掲載されたのを見てか、兵庫県西宮の恵比須座に出演中に、砒素で自殺未遂騒動を起こすまでになる。{ジャパン・クルニクル}の記者が、京都の祇園祭を紹介するに際し、日本人を侮蔑的に書いたことに怒り、「日本人の意見」を投書し、記者の鼻づちを折る。最後の人情噺{英国奇譚}には、両親の期待に背いた人生への後悔も投影され、イギリスの手品雑誌{マジック・マンズリー}に日本の奇術のやり方を連載、清吉夫妻とともに、おそらく、在留邦人向けに口演すべく、中国の上海、香港を訪問。帰国後は、白金三光町に移住して、清吉一家とともに暮らし、強い酒を浴びるほど飲みながらも、快樂亭ホスコを名乗る清吉と共演したり、東京や横浜のいくつかの寄席に出演、**なお、東京の寄席16か所に出演したとの記事がある一方、隠退して忘れられているともあり、北白川宮に英語を教えて小遣い稼ぎ、毎週日曜に車が来宅し、近所の話題に。母親が死去するも、弟妹から連絡が無く、記事で知ってショックを受け、関東大震災で石井家は無事だったものの、寄席や娯楽施設がほとんど破壊されてしまったことに衝撃を受け、脳卒中で倒れ、まもなく没した。****

満鉄発足・・1906＝48歳：**韓国反日暴動**1907＝49歳：**アサヒ** 創刊・1908＝50歳：**韓国併合**・・1910＝52歳：

明治天皇没・1912＝**54歳**：**第一次大戦始**1914＝56歳：民本主義・・1916＝58歳：**ロシア革命**・1917＝59歳：スコを名乗る清吉と共演したり、東京や横浜のいくつかの寄席に出演、**大暴落**・・・1920＝62歳：**原敬首相暗殺**1921＝**63歳**：水平社結成・1922＝64歳：**関東大震災**・1923＝65歳：